

られる。従業員の生活基盤の立て直しのため、区画整理や再開発の早期実現が必要である。再開発を進めるには、行政ではなく、地元住民・企業から都市計画案を提出してゆくことが大切である。

神戸市以外の地域では通常の生活が行われており、ケミカルシューズ産業が取り残されていかないためには、震災前の状態ではなく、それ以上の

発展が要求される。以前から抱えていた問題点を検討し、再建してゆかなくてはならない。そのためには、人材育成のための靴の専門学校の設定や、大手企業と中小企業の共生、アジア系在日外国人を中心としてのアジア型国際都市の形成などが考えられるであろう。

三重県北部における降雪の総観気候学的研究

浦 場 三砂織

三重県北部は多雪地ではないが積雪が20cmを越えることもあり、交通機関等への影響が大きい。1995年12月25日から27日にかけての大雪では四日市の積雪量は48cmを記録した。これは四日市が鈴鹿山脈と養老山地がつくる谷間の吹き出し口に位置しているためであるといわれている。しかしその時の四日市の約10キロほど東北にある桑名にはその3分の1ほどの降雪しかもたらされなかった。

四日市と桑名の降雪には相反する傾向があり、それは850hPaの風向によるものであるという研究がすでにされている。そこで、三重県北部の降雪分布に地形が与える影響についての調査を、地上風はより地形の影響を受けやすいと考え、地上風のデータを使って行なった。対象地点は桑名、四日市、亀山、津の4地点とし、更にそれに岐阜県関ヶ原、大垣の2地点を加えた。そして、三重県北部の降雪分布タイプを四日市多い（四日市タイプ）、桑名多い（桑名タイプ）に分け、更にそれを関ヶ原の降雪量との比較によって6タイプに分類しそれぞれのタイプについての特性を調べた。

その結果、四日市タイプ、桑名タイプともに降雪時間、風向、風速の面にそれぞれ特性が見られ

た。

降雪時間に関しては、降雪時間が比較的長いときは四日市と桑名の降雪量の差は小さくなり、また四日市、桑名と関ヶ原の降雪量の差も小さくなる。逆に降雪時間が長いときは差が大きくなる傾向があることがわかった。

風向に関しては、それぞれのタイプ、それぞれの地点に特性が見られた。しかし事例数が少ないため、信頼性が低く、確かな傾向をよみとることはできなかつた。

風速に関しては、桑名タイプでは桑名が、四日市タイプでは四日市がというように降雪のあるときに風速が多地点に比べて弱くなる傾向が見られた。このことから“微地形と積雪の関係は風速の弱いところで一般に積雪が深い”という現象が比較的大きなスケールの場合にも当てはめることができると考えられる。

三重県北部の積雪分布に対する地形の影響に関しては推測の域を出ない結果となってしまった。しかし、今回地上風向を見てきて、なんらかの特性があるのは確かである。今後、更に事例を増やせば信頼性の高い結果が出せるだろう。

「在日」日系ブラジル人と日本の地域社会

—静岡県小笠郡小笠町を事例として—

大 谷 桃 子

1990年入管法が改正され、日系人には、日本での就労を含めた活動に制限がない在留資格が付与

された。以来6年。日本経済の状況は大きく変化したにも関わらず現在18万人にも上る日系ブラジ